

計画 5-1

チンパンジーにおける Sand

Manipulation の分析

武田庄平（東京農工大学・農・比較心理学）

Ai、Pan、Pendesa、Chloé を被験者として、2 条件（ブース内実験者同室+16 対象物、ブース内実験者同室+7 対象物）を設定し、かつ前年度には行わなかった設定として両条件ともに実験者が積極的に被験者の砂の操作に関わるという条件を導入して、各被験者の砂の操作についての観察を行った。何れの条件も、30 分間の実験を各被験者 1 セッションずつ行った。砂は、珪砂(10kg)を用いた。

実験の結果、前年に確認された砂の操作行動のバリエーションをこえるものは見られなかった。また、実験者が積極的に操作に関わるという場面設定により砂の操作が促進されることが期待されたが、飛躍的な効果は見られなかった。しかし、実験者が砂操作をデモンストレーションすると、それを模倣するというより、実験者の操作の結果できた砂の状態をさらに展開させる操作を行うことが多く見られた。これは、単に示された操作を繰り返す反復応答的反応ではなく、発展自発的反応として捉えると、物の形態の変化を意図的に生成するという対象物加工の萌芽をみることができるし、ヒト幼児における不定型な対象物をかたちにする象徴的遊びに繋がるものである。

計画 5-2

霊長類における自然法則の認識とその発達

達

藤田和生（京都大・文・心理）

昨年、一昨年に続き、霊長類乳児が環境に関する物理的知識を獲得する過程を調べた。本年度は、ケージ室飼育のマカクザル乳児（ニホンザル、アカゲ、ボンネット、カニクイ）10 頭に加えて、群れ飼育のニホンザル、アカゲザル乳児計 19 頭を用い、関節点に光点をつけて暗黒を運動させる、いわゆるバイオロジカルモーション（BM）の認識に及ぼす生育経験の効果に特に着目して分析した。サル乳児を垂直に保持し、種々の運動する物体の映像を見せ、凝視時間を測定した。ケージ飼育個体については、生後 1 週齢からおおむね 28 週齢まで反復検査した。検査の週齢、反復回数は個体により大幅に異なる。群れ飼育個体については 1 回だけ検査した。週齢は 0～21 週であった。その結果、10 週齢以降、群れ飼育個体についてだけ、サルの BM をその倒立映像やでたらめ配置の映像などよりも長く見る傾向が現れ、BM の認識には実運動を数多く見る経験が重要な影響を持つことが示唆された。物体の衝突における因果性の認識では、衝突なしに物体が動き出す映像を好んで見る傾向が、昨年度と同様、12～20 週齢の個体で見られた。サル乳児がこの時期に物体は勝手に動き出さないことを認識していることを示す。物体の一体性の認識に関しては、明瞭な結果が得られなかった。顔図形の認識については、4 週齢以降の個体が、明瞭に非顔図形よりも抽象的顔図形をよく追視することがわかった。チンパンジーの時空間情報の知覚的統合に関する実験的分析を引き続きおこなった。